

俳優

川崎ゆきお

俳優の諸谷は演技で悩んでいた。大根だとの噂が広まったからだ。

それを広げた人間に心当たりはない。諸谷を陥れようとするデマでもない。自然と周囲が言い出した大根だった。

そんな諸谷でもやってこれたのは御曹司のためだ。両親とも俳優で、芸能一家の次男だった。長男は役者にはならずプロダクションを興している。俳優の才能がないことを知っていたからだ。

その長男と双子のように似ているのも気になるころだ。

諸田は兄の紹介で心理学者を訪ねた。父の親友だった人らしく、今は大学も退職し、学者としての仕事からも引退していた。

「演じていないと言われたんです。僕は演じているつもりなんですけど、どの役も同じだって」

諸田に悩みを打ち明けた。

「私は心理学者で、そっちの専門じゃないからね」

「いえ、悩みを解決してほしいとか、精神的ケアをしてくれというんじゃないのです。名優と大根の目の違いを知りたいんです」

「ないさ」

「えっ」

「名優はね、名優を演じているんですよ」

「じゃ、僕は名優を演じているのでしょうか」

「君は努力していないでしょ」

「はい」

「役者としての情熱もない」

諸田は答えにくかったが、軽く頷いた。

「何十年も前になるかな。君のお父さんから同じことを聞かれたよ」

「父は名優なんでしょ」

「だから、名優を演じていたんだよ」

「先生の助言で？」

「そうなるかな。大学では同期で、よく遊んだ関係だからね」

「その目は違うというんです」

「はあ？」

「あのう、以前に出たドラマの演出家に」

「はいはい、その問題ね」

「本気に演じて、その感情になっていないって」

「真剣な眼差しとか、真実を語っているときの目というものなどないのですよ。目の形、瞳の色、そういうのがあるだけです」

「親父はどうやって乗り越えて名優になったのですか？」

「だから、そう思わせるような演技を人前で続けたのですよ。俳優として真摯にやっているように見せる演技をね」